

## 作文指導における教育的関係性

—— 意見文「推敲」に関する生徒理解を手がかりとして ——

埼玉大学大学院教育学研究科 2年 渡辺浩史

### 1. 従来の推敲指導は添削指導であった

作文教育を考える時、推敲は大きな柱の一つである。しかも、国際化の流れの中で、自らの考えを文章の中に反映させるための作業、すなわち推敲ができることが今ほど要請されている時代はない。けれども、従来の作文教育でなされてきた推敲指導は、添削指導と何ら変わりのない指導者側の価値の押しつけにすぎなかったのではあるまいか。つまり、従来の作文教育におけるそのような外的規準を設ける推敲指導に対して、「推敲」を文章の個性化のための作業として、内的規準を想定する立場からの指導、すなわち「推敲」指導を新たに構想する必要があるのではないか。

### 2. 「推敲」指導をする上での問題点

推敲指導は、作文指導の最終段階に置かれることが多い。けれども、「推敲」指導は、作文指導の全段階を通して行わなければならないと考える。そこで、上述のように自らの考えを文章に反映させるという観点から、意見文「推敲」の指導を行う上での指導上の課題、すなわち克服すべきポイントを挙げると、以下ようになる。

- (1) 自らの考えといっても、学習者が初めから自分の意見をしっかりと持っているわけではない。授業のプロセスの中で、学習者が自らの中に発見しつつ形を与えていけるような配慮が必要である（生徒同士の学び合いなども含む）。
- (2) 学習者にとっての「推敲」の意義（仮に「推敲」観と呼ぶ）がそれぞれに自覚されている必要がある。
- (3) 教師自身が、上述のような学習者の目的意識や「推敲」観に注意を払い、同時進行的に理解を深めている必要がある。それがないと指導の手掛かりが失われてしまい、「推敲」指導に関する教育的関係性自体が成立しない。

### 3. どのような教育的関係性が働くのか

意見文を書く時に行われる「推敲」は、学習者の目的意識に左右され、個性的な過程となると仮定することができる。この時に教師がどのように理解し、関わっていけるかがこの研究の主眼である。つまり、学習者自身の目的意識と教師の意図などがさまざまにからみ合うことにより、どのような教育的関係性が成立し、また、それがどのように個性的な文章作成につながるのかについて考察していきたい。学習者が主体的に意見文を書くということは、完結した行為ではなく、その背後に他者（教師）が学習者の思いや目的意識を理解することで、深く関わっているという事実を必要不可欠にする観点から、自らの実践記録をふり返りつつ分析・考察を進めたい。